前言[日本語版]

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17855

前言

本書は、金沢大学連携融合事業「日中両国における無形文化遺産保護と新文化伝統創出に関する共同事業」の平成19年度における取り組みの一つとして、平成19年11月23日に金沢大学サテライトプラザにおいて開催した国際シンポジウム「日中両国の方言の過去、現在、未来」の報告書である。

“文化”という言葉からイメージされるものは、無形文化であれ有形文化であれ、一般にはvisible(目に見える)なものであろう。空気のようにinvisible(目に見えない)な存在である言葉を“文化”の一つと捉える考え方は、或いは一般的ではないかもしれない。音楽はinvisibleであるが、その演奏者はvisibleである。同じく言語文化でも昔話の“語り”であれば、語り部というvisibleな存在がある。このような目に見えるパフォーマンスのみを“文化”と呼ぶのであれば、人口の数だけ存在すると言っても過言でない言葉のバリエーションはその範疇には入らない。ところが、話が“言語の絶滅”となれば、それを“無形文化”と呼ぶことへの抵抗感が薄れるに違いない。例えば、大清帝国の言語であった満州語は帝国の消滅からわずか数十年で絶滅の危機に瀕するに至った。言語の消滅はその民族存立の根拠を一つ失うことを意味する。そのような消失体験のない日本人にとっては別世界の出来事であるに違いないが、実は同様の状況が身近にある。『日本言語地図』(LAJ、国立国語研究所、1966～1974年)を見れば、そこに反映された各地の方言の多くがすでに消失寸前であることが理解されるだろう。

目に見えない文化を保存し、発展させていく手段は、それを使用する集団の政治的、経済的影響力を強化することしかない。しかしそれは事実上不可能である。本シンポジウムでは、日本、中国双方の講演者が、「方言はいずれ消え去る運命にある」と断言している。従って我々の任務は一義的には、方言をいかに記録し後世に残していくか、という点にある。

ここでいう“方言”とは、各地で数百年にわたって話され、受け継がれてきた伝統方言のことである。約百年前に西欧で調査が行われた時、また約半世紀前に日本でLAJのための調査が行なわれた時、伝統方言はなお人々の身近に存在した。2001年、北京語言大学の曹志耘教授をリーダーとする『漢語方言地図集』のプロジェクトが発足し、大規模な調査が実施された。その対象となったのは中国農村の伝統方言である。プロジェクトの開始からわずか6年余りの時間で、調査、編集、作図に至るすべての工程が完了し、まもなく5冊の地図集(北京、商務印書館)が刊行されるのは、奇跡などではなく、スタッフによる昼夜兼行、不眠不休の努力の成果にほかならない。このような歴史的偉業とも呼びうる事業に、我々日本の研究者と金沢大学が貢献できたことを誇りに思う。

本シンポジウムでは、日中間の実質的で有意義な議論が達成された。今後は、“方言をいかに記録し後世に残していくか”という点において、一層の連携強化を図っていきたい。地図集編纂の最も多忙な時期に金沢までお越しいただいた曹志耘、趙日新、劉暁海の各氏、日本の方言学のよき伝統と新しい研究の方向性を的確に伝えていただいた大西拓一郎氏と新田哲夫氏、そして有意義な議論を創造して下さったコメンテーターの皆様に心から感謝申し上げる。

(岩田　礼)